

## 1.2 原子力における誤解とは何か

人間の頭脳活動は何も理解や誤解だけに限りません。異性に対する好き嫌いや趣味なども頭脳活動なのです。ただ、これらは理解と誤解の部類に属さないだけです。

単純に、正しいとされる考えを理解、矛盾する考えを誤解と呼びます。

そうすると、正しい理解を否定する考えは理屈としては無数に存在するから、誤解も多数存在することになります。そのうちの代表的ないくつかの誤解を対象に取り上げて、議論を行うことにします。

(1)原子力誤解は情緒化するその代表的対象が情緒的な‘原子力に関する誤解’である。物理現象を説明するパスカルの原理を誤って理解していてもその誤解を正すのはいとも簡単です。だから、ここでは扱いません。

そもそも、このような物理現象に関する理解や誤解の中には人間の感情が入り込む余地はありません。それは誰にとっても真理であり、それに抗議する人は変人・奇人として誰にも相手にされません。

これに反して、‘原子力誤解’は種々の感情を伴います。極端な感情には‘嫌悪’と‘排除’があります。

反原発マスコミのいう、原子力村の人、御用学者、原子力マネー、などの用語にはこのような感情が込められています。

反原子力報道にはマスコミの‘悪意’がにじみ出ているとあってよいでしょう。

原子炉は原爆である、という理解は科学的に間違っており‘誤解’ですが、本来ならこの‘誤解’には情緒は存在しません。

しかし、原発反対派がこれを口にするとき、そこには原子力を危険視したがる‘意図’が込められています。このような‘情緒’がまつわる‘原子力誤解’は原子力賛否問題の基本的要因です。それ故、原子力誤解の解明に挑戦することには、成功しなければ意味がありませんが、原子力を大事に育てるか否かに関しては、大きな意義があるのです。

(2)アンカー効果と後光効果 それでは、原子力誤解はどのようなメカニズムによって生じるのでしょうか。

本来なら正しい理解であるべき理解は、心の中に存在するアンカーによって心理的に歪曲されるため(アンカー効果)に生じます。また、神聖化された見方が幅を利かす後光効果などによっても心理的にバイアスがかかり、歪曲されて誤解となります。これらについては【文献1】が参考になります。この二つが、原子力誤解が生じる主たる原因です。この歪曲された理解を誤解と呼びます。どれをアンカーにするか、どんな後光の差し方に弱いのかは感情(心理)に左右されます。先の3つの原子力誤解に

共通するアンカーは ‘被爆体験’ です。この感情はまた性格、思想、集団からくる制約、正義感、狡猾的意図、打算的意図、などによって強く影響されるのです。この心理的アンカーに着目すれば、原発維持派と反対派の違いは一目瞭然です。前者は原子力の持つ無限のポテンシャルといった正の側面を見てこれをアンカーにしますが、後者は原発の負の側面、即ち事故の可能性とその悲しさだけに着目し、そのほかの要因には目をつぶります。反原発の新聞の一見論理的な主張は、福島事故の悲惨さを中核にして化粧しているだけだと言って良いのです。それ以外に論ずべき事項は多くあるのに、都合が悪いから、ほとんど目をつぶっています。

(3)ステロタイプ化する新聞の批判形式 考えてみれば、反原発マスコミの主張は原発事故のない安心した社会の実現と銘打って、実は事故の恐怖に直結するアンカーを読者に植え付けようとしているだけでしょう。どうしたらよいか思い付きの対案しか出せなかったのです。

これらの組織の主張は、政権党の施策に対して故なき批判と足を引っ張るだけで、建設的なものはほとんど見られません。これらのマスコミは時代の変化や目まぐるしく変わる国際情勢に即応する能力に事欠いているとしか思えません。